

一 芽衣と親友のレイコは東京の同じ中学に通っていました。しかし、レイコは両親が仕事に失敗したため、家族で親せきをたよって長野へ引越しました。次の文章は、東京から長野へやって来た芽衣が、一年半ぶりにレイコと再会した場面を描いたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

跨線橋を渡った隣のホームに、小淵沢行きの電車が止まっていた。さっきの線はしなの鉄道だが、この小海線はJRなのだそう。二両編成のかわいい列車だった。ドアの横についているボタンを押すと、スルスルとドアは開いた。小諸と小淵沢を結んでいて、むかしから高原列車とよばれているのだそう。高原列車と聞いて、芽衣は白樺林や草原を突っ切って走る列車なのだと夢が広がった。標高の高いところにあるJRの駅の、ベスト九がこの小海線にあるのだという、レイコの知識が芽衣の夢をもっと大きくした。

しかし芽衣は心配になった。中軽井沢駅で買った切符は、しなの鉄道の小諸駅までのものだ。JRの清里駅までの切符をどうしようと思ったが、やっぱりレイコにはアツケラカンが残っていたと、芽衣は少し安心した。

「いいじゃん、車掌が来たら買い足せば。私だって入場券しかないもん」

列車が動きだして、芽衣は窓の外の景色を楽しもうとしたが、レイコのおしゃべりが、ひろがる夢にストップをかけた。そし

ていかに自分が恵まれているか、あらためて感じさせられた。

「私、幼稚園から私立だったから、公立の学校って初めてじゃない。公立の学校って、お金持ちの子、貧乏な子、勉強のできる子、できない子、健康な子、そうでない子っているの。そういうことって、私に物を考えるくせをつけるためにもいいことかなと思っただけだし……。悪いことも何もしてないのに、転校生ってだけでいじめるやつがいるのよね。べつにいいんだし、そんなことは。でも先生が気がつかないふりをするの。それにはまいっちゃったわ。イジメに気がつく、先生として何かしなくちゃいけないじゃない。でも何かをして失敗したり問題が起きたら、出世にひびくものね……」

もともとおとなびたところのあったレイコだが、今、芽衣の目の前にいるレイコは、もっとおとなっぽく見えた。

「さっきの金子クンって？」

「あの子……」

レイコはその瞬間だけ、少女らしさをとりもどしたようだ。目を伏せて、頬がほんのり染まっていた。

「同じクラスの子なの、サッカー部の選手で……。私のことを好きみたい。すごく暴れん坊で、ほら、からだが大きかったでしょ、みんなが一目おいているような子なのね。お勉強はあまり得意じゃないみたいけど……。転校して、私がいじめられているのを、金子クンは初めは遠くからただ見ていただけだったの。私のことを、チラチラ見ていたのは気がついていただけ。でも二学期の途中で、授業中に先生の見えないところでいやがらせをされて、私、我慢してたら、とっぜん金子クンが立ち上がって怒鳴ったの」

そのようすが目に見えるようだ。

列車が民家の軒下すれ状態で走っていることに、芽衣は気づかなかった。痛ましそうにレイコを見つめるだけだ。

「あ、芽衣！ その目、私のこと可哀相だっと思って目よ。私、ちつとも可哀相じゃないからね」

「だけど……」

「全然平気、がんばっているパパとママのことを思ったら、こんなことなんて、全然なんともないわ」

芽衣は浜田山の自分の家庭を思った。経済的にも社会的にも恵まれているけれど、案外レイコの家庭のほうで温かいのではないか、そう感じた。

「金子クンが立ち上がってさ、『おいつ、おまえらア、杉村のこといじめたら、おれが許さねエ。ぶつとばしてやる！』って怒鳴ったのよ。もう、みんなびつくり。先生だってた大口開けてキョトンとして、あんぐりってなものよ。それからなの、私のガードマンになったのは。私を守ってくれるんですって。でもあいつサッカーの練習があるから、いつも私にくっついてるわけじゃないけど。今日はさア、私の東京のボーイフレンドが来るんじゃないかって、心配だったみたいよ。ばかね、あいつったら……。でももう私のこと、いじめるやつはいなくなったの。金子一道のおかげなの。あいつ、見かけよりいいやつなの」

高原列車はふたりの少女と、数えられる程度のお客を乗せて、コトコトと走っていた。あらためて窓の外を見ると、もう晩秋というより初冬の風情だ。なんだかお漬物の臭いがあると思ったら、通路をへだてた席でおにぎりを食べている女性がいた。アルミホイルに包まれたおにぎりの間から、黄色いたくあんがのぞいている。満足そうな女性の顔に、芽衣までが満足した気分になっていた。

久しぶりにこころおきなく胸の内をすべて話してしゃべりつかれたのか、しばらく黙っていたレイコが、芽衣を見つめてにっこりと笑った。

「来てくれてありがとう。なんだか気持ちがつきりしたわ。家族三人の合言葉が実現するまで、私、がんばれそう」
中込という駅に着いたとき、制服を着た高校生が何人か乗ってきた。頬が赤く、素朴だけれど真面目そうな目をしていて。小さな声で大学受験の話をしているようだ。聞き耳をたてると、いま芽衣が通っている学校の名前が出たりして、ふたりの少女はくすぐったそうに笑った。レイコは顔を芽衣に近づけて言った。

「たぶん、合格したら私が通う高校の生徒だと思う。県立で、この辺では一応進学校らしいの。私、信じられないかもしれないけど、いまでもガリ勉なのよ。勉強が趣味みたいながんばってるの。大学はアルバイトをしても東京に行きたいから……。お金持ちじゃないから芽衣といっしょってわけにはいかないけど、でも待っててね」

芽衣は「うん!」とうなずいた。うなずきながら、^②レイコが芽衣の手の届かないところにいるような気がした。

「私、自分がだらしのないような気がする。ぬるま湯の中で夢を見て、甘たれてるみたい……」

「そんなことない。芽衣は芽衣、空想してうつとりしている芽衣が、私は好きなの。太田クンだってそう言ってたじゃない。芽衣は私じゃないし、私は芽衣じゃないわ。でも、私にとって芽衣は、世界中でたったひとりのほんとうの友だちだし、こころの支えなの。私が貧乏でも嫌にならないでね」

「なるわけ、ないじゃない! 私にはレイコちゃん以外に友だちなんていないわ」

そう言いながら芽衣は、激変した家庭の事情が、レイコを以前より数段おとなにしてしまったことを感じていた。レイコはレイコで将来の夢を見ているようだが、芽衣の見る夢との形の違いが、いつかふたりの間の距離を遠いものにするのではないかと、そのとき、芽衣はふと思った。

「私ね、学校にはごく普通の友だちはいるけれど、レイコちゃんは特別なの。みんな何人かでかたまってる行動しているけれど、私は、いまでもひとりでいるほうが多いから……。レイコちゃんだけよ、私のことわかってくれるのは」

「不思議ね。私、東京にいたときって、芽衣といっしょじゃないときは、みんなと同じことをしてないと不安になるみたいな気持ちがあったの。でもこつちに来て、いつもひとりでいることが多くなったら、同じ恰好をして同じ髪の色をしていつもつるんでいる子たちが、何だか汚らしく見えるようになったの。だって、都会で流行ってることを真似したって、地方の街には似合わない」

「ないんですもの」

レイコの口からそんなせりふが出るだなんて、芽衣は信じられなかった。苦労がレイコの感性を変えたのだと思った。

「なアーんてね……。私がこんなことを言うの、変?」

「変じゃない! レイコちゃん素敵」

そうやってふたりの少女が友情を確かめあっているうちにも、列車は高原をトコトコと走っていた。むかしはほんとうに何もないう高原を走っていたそうだが、いまは線路ギリギリのところに家が建っている。芽衣がここに描いていた、シラカバ林や牧場をぬけてというわけにはいかないらしい。一か所、野辺山駅を出たあたりから視界が開けて、牧場らしいところがあるにはあった。

日本アルプスなのだろうか、芽衣にはその知識はなかったが、気がつけば、いかにも山歩きをするような服装のお客が何人かいた。山歩きには興味はなかったが、雪を頂いて連なる山に、芽衣は感動の声をあげた。

「きれい! 輝いている斜面のすぐ隣には影があつて、山つて、険しいほうが感動的かもしれない。毅然として、人間を寄せつけないって雰囲気はこれなのね。レイコちゃんだって、いまは影かもしれないけれど、そのすぐ隣は輝きが待っているのよ、絶対!」

また芽衣の世界が始まったと、レイコは、久しぶりにこころを許せる友だちといっしょにいる安心感を味わっていた。しかし何の苦労もない芽衣が、ほんとうは羨ましく感じないわけでもない。

小諸に来てから、新しい服を買ってもらった記憶がないのに、目の前の芽衣は、相変わらずしゃれたファッションでいる。ほんの少しの妬みを感じていることに気がついたレイコは、自己嫌悪に陥ってしまった。

——芽衣がおしゃれをしているのは、別にわざとしているわけじゃないのに、私って、いやなヤツ……。そうよ私は私でしっかり勉強して、東京の大学に行くんだもの。そしてみんながばかみたいに遊んでいるあいだに勉強して、将来の計画をたてよう。私の力でパパとママをしあわせにしてあげて、自分だってしあわせになるんだ、絶対!——

うつとりと山脈に見とれていた芽衣だったが、現実に戻って面白いものを見つけた。
この列車は一両目の左側に運転席がある。その運転手のいるボックスの壁に『運転中は、運転手に話しかけないで下さい』と貼り紙がしてあるのだ。

「誰か話しかける人がいるのかしら」

「いるんじゃないの？ この辺でもおばさんたちって、けっこう話好きなのよね。お節焼きもいるし……。私の家族が引っ越しをして来たときだって、いろいろ聞きに来るのよね。どうして東京から引っ越して来たのかだの、東京で何をしていたのかだなんて……。余計なお世話よね。この辺の人たちって、ほとんどがむかしからの顔見知りだから、話しかけられても断れないんじゃないの？ だからじゃない？」

それにしても、さっきからおばさんたちの話し声は大きかった。ほとんど他人の噂話に終始していたが、それは高原列車には似合わないと思った。そしておばさんの後ろの席にいる女の子にも、芽衣は首をかしげた。

「レイコちゃん、ほんと！ こんな素敵な田舎にも、ルーズソックスの子がいるのね」

「そうなの。私も他人のことは言えたらじゃないけどさ、日本のどんな田舎に行ったって、流行だけは都会も地方もないみたいなよね」

それは哀しいことだと思った。芽衣は胸の中では、せめて地方の人はその地方の風景に合ったようすでいてほしいと思っていたから。そうでないと文化というものが、日本中同じになつてしまうと心配なのだ。

「でも私、流行を追う子の気持ちだけはわかるの。みんな都会に憧れているのよね。安物でも、ルーズソックスを履いているだけで、都会の子になったつもりでいるの。中身は違うのに。偽物^{にせ}って知ってても、ブランド物を身につけてお嬢さま気分^{じょうさま}でいるのと、同じなんじゃないの？ 知らないけど……」

「もったいないわね。都会にはこんなきれいな風景はないのに……。その地方の風景に似合った、流行に惑わされない生活をすればいいのと思うわ。この神々しいような風景がもったいない」

地方に住む人は都会に憧れ、都会に住む人は地方の風景に憧れる。

「そういうことを『隣の芝生』って言うんじゃないの？」

レイコはひと言であっさりと片づけた。しかし、親子三人で将来は絶対東京で暮らすのだと言うレイコの東京も、芽衣の小さいころからの夢だった軽井沢暮らしも、^③それぞれの『隣の芝生』ではないかと思っていた。

芽衣は、ふと寂しさを感じた。レイコは芽衣に会えて涙ぐんでいたけれど、^④ふたりの間柄は、言葉では言い表せない何か

変わってきていることを、芽衣は察知していた。しかし心細そうに芽衣を見つめているレイコに、^⑤祐恵が見せるような、抱きしめるようなまなざしで微笑みかけた。

ポツンとレイコが言った。

「リンゴ、送ってあげる。芽衣が前に言っていたけど、小諸のリンゴって蜜がいっぱい入っているの。伯父さんの家がリンゴ農家なのよ。安くしてくれるって……。親類だからですって」

やはりレイコから寂しげな表情は消えなかった。

(早坂真紀『芽衣の青春』)

(注)祐恵……軽井沢に住んでいる芽衣のおばさん

問一 ——線部①「アッケラカンが残っていた」とありますが、芽衣はレイコのどのような様子から「アッケラカン」と感じたのですか。二十五字以内で答えなさい。

問二 ——線部②「レイコが芽衣の手の届かないところにいるような気がした」とありますが、これはどのようなことですか。レイコと芽衣のちがいをふくめて答えなさい。

問三 ※部「日本アルプスなのだろうか」しあわせになるんだ、絶対！——におけるレイコの心情の変化を百三十字以内で説明しなさい。

問四 ——線部③「それぞれの『隣の芝生』とありますが、『隣の芝生』とは、『隣の芝生は青い』を省略したことわざです。レイコにとっての『隣の芝生は青い』とは、どのようなことですか。二十字以内で答えなさい。

問五 ——線部④「ふたりの間柄は、察知していた」とありますが、ふたりの関係はどのように変化したと読み取れますか。以前の二人の関係と、その関係が変わったきっかけをふくめて説明しなさい。

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

〈1〉

情報は、なにかをしたり得たりするための手段として必要なものですが、いまは情報を手に入れること自体が目的になってしまったようなところがあります。

たとえばどこか知らない場所へ仕事で行かなければいけないとします。パソコンや携帯のインターネットを使えば、出発地から目的地までの交通手段や所要時間はもとより、乗り換えしやすい車両などかなり細かいところまで調べられます。すると、できるだけ効率のいい経路や手段を選ぼうとします。また費用についても検討比較します。

旅行の計画でも、まずどの旅行会社を使うのがいいだろうか、インターネットで予約したほうがいいだろうか、その場合キャンセルの仕組みはどうなっているだろうか、こちらのサイトから申し込んだほうが安いけれどドリンク付きの特典はないぞ、など、いろいろと気になることが出てきます。

やっぱり代理店にしよう、でも近くにある店はどれだろうか、何時までやっているだろうか。会社が終わってから間に合うだろうか、そのためには何時の地下鉄に乗ればいいのか、どこで乗り換えたらいいのか……。つぎつぎに関連する疑問がわいてきます。これらはインターネットなどで調べようと思えば調べられるので、つい確かめたくなくなってしまうのです。

これ以外に別の要素が加わった場合、それらも調べることが出来ます。現地の気候はどうだろうか、途中で飲みやげを買っていかうか、どこで売っているだろうか。そういえばあそこの和菓子はおいしかったからそれを買いたいけど、何時までだったら店は開いているだろうか……。調べる事柄は増えるばかりです。

もし調べる手段がそれほどなければ、代理店の人に任せて、あとはとにかく余裕を持って行こう、となります。調べはそこそこにして時間的余裕を考えて旅程を組んだほうが結果としてはるかに効率的だということにもなります。

〈2〉

①「策士策におぼれる」ということわざではないですが、自分のやり方に固執すると思わぬ落とし穴にはまることがあります。

自分でインターネットや書物を頼りに調べること熱心な人によくみられるのが、すべて自分で調べようとすることです。

車の運転でも、行き先までの道筋を事前に調べて、あとはカーナビを頼りにして行きます。そして、万一予想通りにならないかたつたときにも、人に道を聞きたがりません。ちよつと車を降りて地元の商店のおじさん、おばさんに聞けば早いかもしれないのに、あくまで自分の頭のなかで解決しようとしています。

この傾向は少し危険です。「道探し」ぐらいの問題ならいいのですが、マイホームの購入や投資など大きな問題になったとき、事前に知識と情報を蓄えるのは大事ですが、いくら研究してもしよせん素人は素人です。気がつかないことはあります。それを、「私はこれだけ研究したから」と、思い込んでいると危ない目に遭います。

大事なのは、書物やインターネット上の情報だけでなく、できればその道の専門家に尋ねることです。

〈3〉

人に聞くことの重要性について話しましたが、これにもポイントがあります。たとえば、役所などに電話をして医療保険やなにかの手続きを尋ねたり、病院や金融機関、クレジットカード会社や不動産屋などに問い合わせをする機会は、みなさんにはこの先いくらでもあるでしょう。

こうしたとき、うまくやりとりができないと二度手間三度手間になったり、誤解したり、言い争いになったりします。それを避けるための八つのポイントを、仕事上の経験から挙げてみます。

(1) 質問することは、あらかじめ整理してメモしておく。

(2) 聞いた内容についてもメモを用意して、記録する。

(3) 質問したいことを告げて、誰に回答してもらうのが適当かを確認する。

(4) かならず、対応に出た人の部署と名前を聞く。

(5) ② 相手が「……だと思う」とか「おそらく……」といった表現をしたときは、「はっきりと断言できるかできないか」を確認する。

(6) 理解できない点は、繰り返し聞く。「申し訳ないですが、もう一度その点を説明していただけますか」というように。

- (7) あまりにも訳のわからない人や、信頼できそうな人が対応に出たら、改めて電話をして別の人に尋ねる。
- (8) 答えに対するお礼を言う。

当たり前のようなことがほとんどですが、とくに重要なのは(2)(4)(5)です。改めて事実を確認したり追加質問をする場合に備え、また相手に責任の所在を理解してもらうためにも、はっきりと名前を聞くことは重要です。

また、「だと思えます」と言われてそれを信用してみると、ちがっていることがよくあります。相手は自信がないのと、責任を回避するためにそうした言い方をする場合があります。こういうときは、いやみに聞こえないように「……だと思えますと言われましたが、もしちがつていると困るので確かところを知りたいのですが、よろしいですか」というように、確認することが大事です。すると「少々お待ちください」と言つて、調べ直した結果、「すいません、常にそういうわけではありませんでした」などと訂正されることがあります。私自身よくある経験です。

大事な事実は詰めることです。詰めが甘いと、自分が損害を受けることになりますし、あとになって「言った、言わない」とか「話がちがう」などともめる原因にもなります。いくら相手に非があるからといって、あとで責めてもなんにもなりません。無駄に怒ったりしないためにも、しっかりとした事実確認は大切です。

〈4〉

人が言ったことを簡単に信用してはいけません。その人がウソをついているというのではなく、誰でも思い違いや錯覚があります。だから、大事なことにについて尋ねたら、聞いた情報の「裏を取る」ことです。つまり、その言葉通りかどうか別の情報源にあたったりして、自分で確かめることです。

知人やその道に詳しい人に、なにか尋ねたときに「たぶん大丈夫だと思うよ」と言われて、安心してしまうことがあります。人によっては、安心したいという思いがあるのと、なにか問題があったときには「それを言った人の責任にすればいい」と、心のなかに甘えがあるからです。しかし、あとで人のせいにしても何の解決にもなりません。事実かどうか判断するには、一つだけでなく複数の情報源にあたるといいでしょう。インターネットの情報のところでも書きましたが、できるだけその情報を発信しているところにあたって情報の真偽や質を確認することです。

基本は自分の目と耳で、できるだけオリジナルの情報源にあたることです。二次情報、三次情報、風評や人のうわさ、まことしやかな広告など、なにかにつけて黙っていても情報は多すぎるほど入ってきます。そのなかで何を信じて、どう対応するかを決めるのは難しいですが、こうした基本を決めておけばそれほど揺らぐことはないでしょう。

(川井龍介『社会を生きるための教科書』)

問一——線部①「策士策におぼれる」とありますが、このことわざにあてはまる〈1〉段落の具体例をまとめなさい。

問二——線部②「相手がく確認する」とありますが、これはなぜですか。「確認」しないとどうなるかをふくめて百字以内で説明しなさい。

問三——〈4〉段落において、筆者はどのように情報に接するとよいと言っていますか、説明しなさい。

三

次の各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 説明をカツアイする。
- (2) 高山植物のグンセイ地。
- (3) 食事と運動のソウジョウ効果で健康になった。
- (4) 時代のチヨウリュウ。
- (5) 手サゲカバンを新調する。

このらんには
何も書かないこと

問三		問二		問一		問五		問四		問三		問二		問一	
(1)															
(2)															
(3)															
(4)															
(5)															

⑨

⑧

⑦

⑥

⑤

④

③

②

①

この人には何も書かない